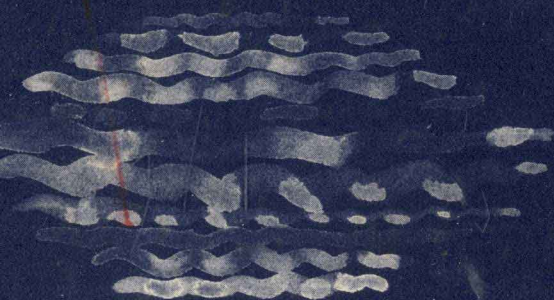


浜万次郎の生涯

中浜 明 著



中浜万次郎の生涯

中浜
明
著

富山房

中浜万次郎の生涯

中 浜 明 著

定価 700 円



1970年12月 1 日印刷

1970年12月10日発行

発行者 坂本 起一

発行所 富 山 房

東京都千代田区神田神保町 1 丁目 3 番地

電話 東京 (291)2171~7, 振替 東京 54529

印刷 新灯印刷株式会社

製本 富士製本株式会社

© by Akira Nakahama

Printed in Japan. 1970

(落丁乱丁はお取り替えます)

0023—023002—7313

まえ
がき

万次郎の漂流物語は、明治以来単行本の形で出たものだけでも二十種にあまります。絵入り話と
いった姿で少年雑誌などにのせられたものは、数知れずといってよいでしょう。

それらの大部分が、少年冒険談、立身出世物語といった形式で評判を得て来たようです。郷土の
偉人にされたり、海外発展とか、その時々々の修身のお手本みたいに扱われたものもあります。

芝居では、左団次の主演で、明治二十一年の春、新富座で板にのせられたものに始まっていくつ
もありますし、小説になったり、脚色されてラジオ、テレビに仕組まれたものも少なくありません
が、ゆかりの者としては、やはり史実をたいせつにしたい気持ちです。

進取の気性とかはもちろん、海外勇飛の思想など持ち合わせていなかった平凡な日本の一少年
が、めぐり合わせたその時々の特異な境遇を、すなおに受けとめて、精一杯誠実に、そのくせこと
さらの努力とか、無理な背のびなどしないで生きて来た一生でした。

それはなんといっても、一方、国外ではアメリカ庶民の善意に育てられたものであり、他方、国
内では江戸末期の進歩的な大大名とその重臣たち、革新派の幕府の高官や学者たちの庇護ひごによるも
のだったのです。

それがまた、ちょうど日本国の政治的大変革の時期にも当たったもので、彼なりの役割を自然に
果たすことにもなりました。

明治期にはいると、革命のできない革命家に似た、きわめて寂しい晩年を送らざるを得ないので

す。

そうした万次郎を伝えたいと思います。

このささやかな一代記が、万次郎の小さな定本といった物となつて、あとは各分野の方々が専門の立場から、それぞれの解釈を展開してくだされば満足なのです。

やさしい話しことばで書きましたから、中学生の読み物にも向きましようし、史実の骨筋は通してありますので、おとなの方々にもご覧いただくに堪えると思います。ただ、同じおとなでも、日米両国親善の掛け橋などと、うわべの体裁よい言葉で、万次郎の貴重な体験を利用することを許すわけにまいりません。このような行為のおかげで、日本人もアメリカ人も、ともに不幸なめにあって来たのです。こうしたうわべだけの繁栄の中に、どうしてほんとうの平和なんかあり得ましよう。

日本の貧しい漁師の少年と、アメリカの善意ある庶民大衆との交流そのものにこそ、両国民の、それこそ友好と親善の源が存在するのであります。

この一代記も、両国民同志が、ほん物の平和と幸福へ向かう小さな道付けの一つとして役立つならば、これ以上のことはありません。

この一代記では、史実の出所、出典など、いちいち示すことをしませんでした。別に万次郎関係史料の集大成といったものを公にする責も感じています。

一九七〇年一月

中 浜 明

目次

第一章	難船	3
第二章	無人島の生活	11
第三章	ジョン・ハウランド号に救われる	23
第四章	留守宅 ゑしや のなげき	33
第五章	ジョン・ハウランド号の捕鯨航海	37
第六章	フェアーヘブンの生活	55
第七章	フランクリン号の捕鯨航海	71
第八章	カリフォルニアの金山かせぎ	105
第九章	ホノルルで帰国の準備	111
第十章	琉球へ上陸	125
第十一章	鹿児島到着——島津斉彬の聴取り	137
第十二章	長崎奉行所の取り調べ	141

第十三章 故郷に帰る 149

第十四章 黒船来る——江戸幕府に召される 157

第十五章 万次郎に通訳させない 173

第十六章 吉田松陰への影響 179

第十七章 公私多忙 187

第十八章 威臨丸の航海——往航 199

第十九章 遣米使節のワシントン行き 217

第二十章 威臨丸の帰航 225

第二十一章 国内旅行 255

第二十二章 明治維新と万次郎 273

第二十三章 万次郎の晩年 289

附録 中浜万次郎年譜 293

トビックス 女性の漂流物語 10

東洋のロビンソン 21

映画の「白鯨」 22

みやげばなし 148

万次郎の呼び名 172

万次郎はアメリカに何年いていたか 185

日本の医学 216

著者略歴 301

装丁 笠原須磨生

中 浜 万 次 郎 の 生 涯

第一章 難 船

アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号 (The John Howland) の航海日誌の一八四一年のところに、つぎのようなことがしるされています。

日曜日。六月二十七日。東南の微風。島が見える。この島に海亀がいるかどうか。午後一時二そうのボートを出す。島には、難儀して疲れはてた五名の人間がいるのを発見。本船に收容。飢えを訴えているほか、彼らから何事も理解することができない。

島を観測すると北緯三〇度三一分。

明治元年は一八六八年ですから、この記事は明治元年から二十七年前のことなのです。

土佐の高知の町から西南二五キロほどのところに宇佐という漁村がありました——今日では真珠養殖の基地になっています。天保十二年（一八四一年）の正月五日、この浜辺から一そうの漁船が漁に出ました。乗組みは五人。いちばんの年上は筆之丞ふでのおじょうという船頭で三十六歳。つぎがその弟の重助、二十三歳。そのまた弟の五右衛門ごえもんが十四歳。この三人兄弟のほかに二十四歳の寅右衛門とらえもんと、それからいちばん年下が十四歳になったばかりの万次郎。以上の五人でした。このうち万次郎だけは、この宇佐の者ではありません。同じ土佐でも、西南のはずれ——宇佐から陸路一五〇キロもはなれた——足摺岬あしずりみさきの中ノ浜という小さい漁村の出身なのです。

この漁船は、宇佐の船主徳右衛門とくえもんの持ち舟で、長さ八メートルの小舟。もともとカツオ取りの舟

なのですが、この時はハエ縄を用意して出かけました。白米四〇キロと味噌その他の食糧、それに炭と飲み水も積みこんでいます。

宇佐を船出したのは、前に述べた一月五日の午前十時。西南めざして海岸沿いに六〇キロほど進んで、与津岬の沖、ドントと呼ばれているところに達し、ハエ縄漁に取りかかりました。ハエナワというのは、つり針の付いた短い糸がたくさんつりさがっている長い縄。そういった漁具なのです。

第一日には、一匹の獲物もありません。その岬のかげに錨をおろして夜をすごしました。

つぎの日は朝早く、さらに西南に一五キロほど進んで佐賀浦の沖で漁をはじめましたが、やはり不漁で、小さな魚一五、六尾しかとれませんでした。そこから少し先の井ノ岬に近い白浜の海岸近くに錨をおろして、その日にとれた小魚を煮て晩ご飯をすませ、舟の中に寝ました。

三日目の朝は、まだ暗いうちに出帆。いよいよ足摺岬の東の沖に向かいました。このあたり一帯、海の底に一筋の大きな溝のような切れ目ができていて、たくさん魚がすんでいるので、各地から漁船がたくさん集まってくるのでした。

この日も漁船は先を争って、この漁場へ向かいました。筆之丞たちも、ころ合いの所に舟を留めて、ハエ縄をおろしましたが、またたくまにたくさんさんのアジ（鯷）をつり上げました。とかくするうちに午前十時ごろ、西北の風が吹き起こって、天の一方に黒い雲が現われたと見るまに、それが

急にひろがって太陽をおおい、風も吹きつゝて来て、海のようなすくなくって来ました。漁船は、めいめい陸地へ向かつて逃げ出しました。筆之丞の舟も急いで縄を引き上げて、陸の方へ漕ぎもどるのですが、正午ごろになると雲も散り、風もややおさまって来て、海は静かになって来ます。舟のまわりに魚の群れが、そここに見えます。それがタイ（鯛）やサバ（鯖）だということもわかるようになりました。で、舟を留めて、またハエ縄をおろしはじめたのです。ハエ縄を六桶^{おび}をおろしたころ、またまた西北の風が吹き起こつて来たので、一同は急いで縄を揚げて引き返そうと思って、ハエ縄を三桶まで引き揚げましたが、風はますます吹きつゝて、波も高くなつて、舟は危うい状態となつてきましたので、まだ海に入れてあるハエ縄を引き上げる余裕もなく、縄を切つて陸へ向かつて漕ぎもどるのです。

遠く近くで、いっしょに漁をしていた舟は、そのじぶんには、もう一そうも姿を見ることができません。風は強まり、波は高くなるばかり。小舟のことなので、木の葉のようにもてあそばれ、今にもひっくりかえりそう。それに加えて日は暮れかかつて、あたりは、だんだん暗くなる始末。まだまだ陸地は遠く、二丁の櫓^{うし}を代わり合つて、力いっぱい漕^こぎ続けても大波を乗り切るのは容易なわざではありません。ちょうどまた、このとき、一本の櫓^{うし}の角^{かく}が抜けてしまつて、櫓綱^{うしづな}が張れず、漕げなくなつてしまいました。応急の手細工で、これはどうやらまに合わせに直すことができたのもつかのま、こんどは櫓^{うし}がまん中からぼっきり折れてしまったのです。もう一丁、櫓があるのです。